

令和3年度小中連携による学力向上推進地域指定事業実施計画

吉野ヶ里町立東脊振中学校

校長 森田直樹

1 研究テーマ

「小中連携による基礎学力を身につけ、かつ主体的に学ぶ児童生徒の育成」
 ～基礎学力の定着と、学習マネジメント力を高める指導方法の工夫～

2 研究のテーマ設定の趣旨

吉野ヶ里町立東脊振中学校区は、小中各一校からなり、児童のほとんどが、東脊振小学校を卒業後、東脊振中学校に進学する。ここ数年は両校とも特別の教科・道徳を中心に研究を進め、児童生徒の心の育成を図ってきた。特に中学校においては、TTを取り入れた授業形態の工夫も行っている。

本校は、生徒数187人、学級数9クラスの中規模校である。生徒は小さいころからの人間関係ができており、誰とでも親しい関わりが持てている反面、友達と競い合ったり周囲から刺激を受けたりする機会が少ないためか、学習意欲がなかなか高まらないという現状がある。また、集中力や粘り強さに欠ける生徒も少なくない。さらに、家庭学習による基礎的・基本的な知識・技能の補完と定着にも課題があり、学力の二極化の傾向も少しずつ顕著になってきている。

令和2年度に実施された佐賀県学習状況調査においても、以下の通り、県平均より低い状態である。

- ・ 観点「知識・技能」では、全ての学年・教科において、県平均を下回っている。
- ・ 観点「思考・判断・表現」では、2年生（現3年生）の国語を除く全ての学年・教科において、県平均を下回っている。
- ・ 問題形式「記述式」では、1・2年生（現2・3年生）の国語及び2年生（現3年生）の理科を除く全ての学年・教科において、県平均を下回っている。

つまり、新学習指導要領が求める「各教科で学ぶべき内容について体系的に理解できており、応用できる形で頭に入っているか」「各教科における課題や問題を解決するために、スキルを使ったり適切に表現したりできるか」といった学習状況において、大きな課題があることが分かった。

以上のことから、基礎学力を身につけさせ、それを応用して自分の考えを伝え合ったりまとめたりする活動を設定するような授業づくりが必要だと思われる。また、生徒自身が学び方を見直し、夢や目標をもちそれを実現するために、主体的に学びに向かう力を身につけさせなければならない。

今年度は、研究の1年目であることから、校内で異教科の教員を組み合わせた4つの授業チームを編成し、「授業相談会－授業－授業振り返り会」を行い、異教科間での意見交換やアイデアの共有をしやすい雰囲気をつくることから始める。その上で、授業づくりのよりどころとして以下のことに取り組み、課題解決の第一歩としたい。

- ・ 「授業づくりのステップ1・2・3」を活用し「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の場면을授業に位置付けることで、主体的に学んだり、課題意識をもって学習に取り組んだりする生徒の育成を目指す。
- ・ 生徒会と連携した「月1満点テスト」の実施や、タブレットPCを活用したドリル活動などによって、基礎学力の定着を図る。
- ・ 授業の受け方を見直し、主体的に学ぼうとする態度を育成する。
 （学習マネジメント力：授業の受け方）
- ・ 起床時間、家庭学習時間、就寝時間等を記録し、自分自身の生活リズムを振り返らせる活動を通して、計画的に学習に取り組んだり、生活習慣を調整したりする力を育成する。
 （学習マネジメント力：振り返る力、やり抜く力、計画性）

3 取り組むテーマの成果指標及び目標

(1) R3年度

<p>成果指標</p>	<p>① 県調査の各教科の平均正答率で、同一生徒による学校の正答率の対県比 【共通】 ・ 中学2年生 実施教科（5教科） （R2一県調査【中1時】とR3一県調査の比較）9</p> <p>② 「授業改善リーフレット（授業づくりのステップ1・2・3）を活用して授業づくりや授業の振り返り、指導案作成などを行っている」と考える教員の割合</p> <p>③ 『月1満点テスト』やタブレットPCを用いたドリル活動によって、基礎学力が向上した」と考える生徒の割合</p> <p>④ 「主体的に授業に取り組むことができるようになった」と考える生徒の割合</p> <p>⑤ 「生活リズムの記録を通して計画的に家庭学習に取り組むことができるようになった」と考える生徒の割合</p>
<p>成果指標の目標</p>	<p>① 2年生 （現状） ⇒ （目標） ⇒ （結果） R2 12月 ⇒ R3 12月 ⇒ 国語 0.97 ⇒ 1.00 ⇒ 社会 0.95 ⇒ 0.97 ⇒ 数学 0.81 ⇒ 0.85 ⇒ 理科 0.87 ⇒ 0.90 ⇒ 英語 0.76 ⇒ 0.80 ⇒</p> <p>② 「肯定的」回答の割合 （現状） ⇒ （目標） ⇒ （結果） 78.6% 80%</p> <p>③ 「向上した」と考える生徒の割合 （現状） （目標） （結果） アンケート実施なし 75%</p> <p>④ 「主体的に授業に取り組んでいる」と考える生徒の割合 （現状） （目標） （結果） 97.7% 97.9%</p> <p>⑤ 「計画的に家庭学習にとりくんでいる」と考える生徒の割合 （現状） （目標） （結果） 73.9% 75%</p>
<p>目標達成のための取組</p>	<p>① 基礎・基本を確実に習得させ、授業に思考スキルを使った学習活動を取り入れて、生徒が自分の考えを伝え合ったりまとめたりする場面を設定する。</p> <p>② 各授業において、「めあて」「まとめ」「ふりかえり」の場면을位置付けて、生徒が課題意識をもって学習に取り組み、主体的に学び合う授業を実践する。</p> <p>③ 生徒会と連携した「月1満点テスト」を実施する。また、タブレットPCを活用したドリル活動に取り組む場面を設定する。</p> <p>④ 授業の受け方を見直し、真剣な態度で取り組み、学習内容を理解しているかについて生徒自身が振り返る。また、その結果を教師の授業改善につなげる。</p> <p>⑤ 「生活リズム記録表」を作成し、「計画－記録－振り返り－見直し・修正」のサイクルを、生徒自身が自分ごととして実践する場面を設定する。</p>

4 事業期間

令和3年4月 ～ 令和4年3月

5 実施・研究内容

(1) 協議・検討のための会議等の設置

主な構成等	開催予定回数
○学力向上に係る小中連携推進委員会 管理職、教務主任、研究主任、学力向上対策コーディネーター	7回
○小中合同研修会 全教員	2回
○校内研究推進委員会 管理職、教務主任、研究主任、学力向上対策コーディネーター、各学年代表(主任等)、学力向上推進教員	13回
○校内研究会 (うち専門部会の実施を含むもの：5月、6月、7月、11月、1月)	13回 (5回)
○授業研究会(公開授業及び小学校からの参観1回を含む)	8回

(2) 予定している主な調査・研究活動

- ・ 諸調査について、校種や教科の枠をこえての分析
- ・ 各教科における、「指導目標」「手立て」「評価」の関連付けと整理
- ・ 研究授業(年間1回公開し、小学校とも相互参観を行う)
- ・ 生徒の実態調査
- ・ 先進校視察及びその研修会

(3) その他、当事業において実施する事項

- ・ 学力向上通信の発行
- ・ 教師対象の学力向上についての講演会の開催

6 期待される効果

- ・ 全教員が4つの授業チームに分かれ、異教科間で指導方法の工夫を共有することにより、授業改善の視点を多方面からもつことにつながり、授業が深化したり広がったりして、これまでよりも発展した授業展開を図ることができる。
- ・ 「授業づくりのステップ1・2・3」を活用しながら、具体的な「めあて」の提示や、生徒の言葉による「まとめ」と「ふりかえり」に取り組みせることにより、生徒が課題意識をもって、主体的に学ぶ力を育むことにつながる。
- ・ 生徒会との協働やICTの利活用によって基礎学力の向上を目指すことで、生徒たちが主体的に学習に取り組む態度の育成につながる。
- ・ 授業の受け方についての見直しと実践、振り返りの結果をうけて、生徒は自分の学び方を改善し、教員は学習指導の在り方を改善することにつながる。
- ・ 小・中学校が連携して、生活リズムの記録に関する取り組みを継続して行うことにより、家庭の理解・協力も得やすくなり、児童生徒が家庭学習に計画的に取り組むことができるようになる。